エアシー・バトル

エアシー・バトル室
（訳者：　平山　茂敏）

“Air-Sea Battle,” Air-Sea Battle Office, Department of Defense HP, May 2013.

翻訳の趣旨（訳者）

エアシー・バトル構想は、戦略・予算評価センター(CSBA)等の提唱する構想として世に出た後、公式にはQDR2010で初めて言及されたものの、その詳細は長く明らかにされてこなかった。その後、グリナート海軍作戦部長らによって、昨年2月に「エアシー・バトル(Air-Sea Battle)」と題された論文が American Interest 誌上に発表され、本年5月には「死の連鎖を断ち切れ(Breaking Kill Chain)」が Foreign Policy に発表された。

そして、本年5月にエアシー・バトル室から公表されたのが、公式文書としては初めての「エアシー・バトル」である。本文書は、「エアシー・バトル構想」秘密版、「同別紙」、「2013 年度エアシー・バトル執行計画」の3文書から秘密に該当する部分を削除して要約した文書であり、エアシー・バトル構想の全てを語るものではないが、本構想の包括的な絵姿を把握する上で、唯一の公式文書という点で極めて価値がある。

本文書の公開を機会に、米国は本構想に基づく国防力整備を加速させるとともに、同盟国やパートナー諸国と本構想に基づく連携の強化に動く可能性もあり、我が国の安全保障を考える上でも、重要な文書であると考える。

本文書は 5 月 12 日付の秘密版エアシー･バトル構想 Ver.9.0、同別紙及び 9 月 12 日付の 2013 年度エアシー･バトル執行計画から、秘密区分を解除した要約版である。

前　言：エアシー･バトル構想

その創成期から、米軍は新たな脅威に対応するために常に自らを適応させてきた。エアシー･バトル(ASB: Air-Sea Battle)構想はリスクを減少させ、合衆国の行動の自由を維持するための中核となるものであり、合衆国の能力を改善するための軍の最新の努力を反映している。これまでの努力と同様に、この構想は新たな創造的な方法で、軍をより良く統合化することを狙いとしている。これは米国の戦力投射、及び 21 世紀に向けた米国の国家安全保障戦略の重要な支援要素の、自然発生的で思慮に富んだ発展である。

エアランド･バトルは 1970 年代及び 1980 年代に欧州におけるソビエトに支援された共同武力攻撃に対抗するために立案された。エアランド･バトルの中核要素は、（NATO）同盟軍と交戦する前に（ワルシャワ条約機構軍の）第 2 梯団を弱体化することであった。この使命は主として空軍に割り当てられ、これによりかつて無い規模の陸空軍間の協調が生まれた。エアシー･バトル構想も縦深攻撃のためにデザインされているが、(エアランドバトルが) 空から見た陸上領域に焦点を当てていた代わりに、エアシー･バトル構想は優位を創出するために 5 つの領域（空、陸、海、宇宙、サイバー空間）にまたがる統合作戦について述べている。更にエアシー･バトル構想はこれら 5 つの領域にまたがる自らの後方の部隊についても防衛を試みるという点でエアランドバトルと異なっている。エアシー･バトルの防衛的側面は、我々の宇宙配備プラットフォーム、陸上部隊、空軍基地、主力艦艇、ネットワーク・インフラに影響を及ぼし得る様な、更に長射程でこれまで以上に精密に誘導される武器に直面した統合軍がリスクを下げる手助けをする。

エアシー･バトルは戦略ではないが、平時及び戦時を通じて国際公共財の中で戦力を投射し作戦を支えるという国防省の使命の重要な要素である。エアシー･バトル構想の履行はエアシー・バトル室（ASB Office）を通じて（各軍と）調

整され、長期にわたって部隊を発展させ、今後何年にもわたって軍に組織的、構想的、計画的変革を周知しつづける様にデザインされている。エアシー･バトル構想は、敵対的な主体からの侵略に対抗するための幅広い選択肢を意思決定者に提供することを狙いとしている。紛争が低烈度の段階では、本構想は意思決定者がパートナー達と共にアクセスを担保し、行動の自由を維持し、武力の誇示を行い、或いは限定的な攻撃を実行することを可能にする。紛争が高烈度となった場面では、先進的な武器システムによる挑戦にも関わらず、本構想は侵略を打倒し、エスカレーションによる優位(escalation advantage)を維持する能力を保持する。

エアシー･バトル構想は、安全保障環境を形成することを狙いとした一連のイニシアチブにおける限定的だが重要な要素である。他の構想と同様に、エアシー･バトルは平和と戦争の双方に重要な貢献をしている。本構想で唱道される改善された戦闘能力は、潜在的な侵略者の意思決定の計算に影響するだろう。加えて、本構想で明らかにされた諸能力への米国の継続的な投資は、我々の同盟国とパートナー諸国に新たな自信をもたらし、国際社会の国際水域及び空域に対する権利にあわよくば挑戦し、拒否するかも知れない潜在的な侵略者から米国が退いたり、屈服することは無いのだということを明らかにする。安全保障支援計画やその他の政府全体の尽力と組み合わさることで、エアシー･バトル構想は紛争中のエスカレーションによる優位を維持し、国際公共財における安全と繁栄を支えるための米国の関与を反映している。

1　導　入

国防省は、米国が戦力を投射し国際公共財の中で行動の自由を維持する能力を確保するようなオプションを探求し、採用する必要性を認識している。2009 年 7 月、国防長官は海軍省及び空軍省にこの課題に取り組み、エアシー･バトルと呼ばれる新たな作戦構想に着手するよう指示した。それから、米陸軍、海兵隊、海軍及び空軍はアクセス阻止・エリア拒否(A2/AD: anti-access/area-denial)の軍事的諸問題に取り組むために、新たな、そして革新的な方法で協力してきた。そして 2012 年 1 月、合衆国大統領と国防長官は、アクセス阻止・エリア拒否にも関わらず米軍が戦力を投射できる任務を特に課した新たな国防指針「米国のグローバルなリーダーシップの維持 : 21 世紀の防

衛のための優先事項(Sustaining U.S. Global Leadership: Priorities for 21st Century Defense)」を導入した。2012 年秋、4 軍全ての副参謀総長が、エアシー・バトル構想を執行する枠組みを設立する合意文書に署名した。本構想は、国際公共財の中にあって行動の自由を維持すると共に、現在及び将来の統合作戦を可能とする作戦上のアクセスを確保するために、アクセス阻止／エリア拒否環境に影響し、これを利用することが出来る統合軍の発展を通じて具体化される。

以下はアクセス阻止・エリア拒否の脅威が米国と同盟国軍に突きつけている軍事的問題である:エアシー・バトルがいかにしてこの問題に取り組むのか？各軍及び統合軍の発展におけるエアシー・バトルの役割は何か？エアシー・バトルがどのように実行されるか？本文書は、エアシー・バトルの全体像を提供するとともに、各軍の発展プロセスにおいて各軍がエアシー・バトルの教義をいかに運用し、実行するために何をしているかを明らかにすることを狙いとしている。本要約は「秘密区分なし」のレベルで書かれていることから、構想及び関連活動の全てについて詳述することはできない。オリジナルのエアシー・バトル構想、その別紙、及び 2013 年度執行基本計画(IMP: Implementation Master Plan)は、いかにして統合軍がアクセス阻止・エリア拒否の脅威を打倒するために発展されるべきか、各軍がこのための提案をいかにして執行するかについての詳細を記述しているために秘密に指定されている。これらの限定文書は知る必要があり、必要な取り扱い許可を有する個人に対して、これを読むことが推奨されている。しかしながら、ここで示されている内容は（オリジナルの）エアシー・バトル構想と 2013 年度執行基本計画から直接翻案し、エアシー・バトルとその具現の中核的アイデアと関連活動を細心の注意を払って示したものである。

2　アクセス阻止・エリア拒否(A2/AD)

アクセス阻止・エリア拒否能力とは、戦闘のために赴き、一度展開したらそこで効果的に戦闘する米国及び同盟国の能力に挑戦し、これに脅威を与えるものを言う。特筆すべきは、侵略者はしばしば同じ能力をアクセス阻止とエリア拒否の双方の目的に使用することである。これが米国及び関連する遠征作戦に対するアクセス阻止・エリア拒否の効果である。

アクセス阻止・エリア拒否能力とこれを運用する戦略とが相まって、米国の

戦力投射を一層危険に、時にはコストを高め、一方でほぼ互角の競争相手や地域大国による国境の遥か遠方への強圧的な力の行使を可能にする。最も厳しいシナリオにおいて、米国はかつて行っていたような手法、すなわちあるエリアに戦闘力を事前展開し、詳細な予行演習や全軍の一体化のための準備活動を行い、そして望む時と場所で作戦を実施するといった形では部隊を運用できないかも知れない。これらの先進的なアクセス阻止･エリア拒否能力を獲得することで、仮想敵は米国が過去半世紀にわたり慣れ親しんできた戦闘条件を変革しつつある。

アクセス阻止（A2: anti-access） 友軍の戦域内への展開を遅延させ、或いは本来望んでいたよりも紛争の中心より遠方の位置から部隊に作戦させることを意図した活動
エリア拒否(AD: area-denial) 侵略者がアクセスを阻止できないか、阻止しないエリア内において、友軍の作戦を妨害することを意図した活動。エリア拒否は戦域内における機動(maneuver)に影響する。

アクセス阻止･エリア拒否というアイデアは新しいものではなく､敵のアクセスと機動能力を拒否したいという願望は時代を超越した戦闘指針であり、これまでは得難かった軍事能力により攻撃的な潜在プレイヤーの力が増大することにより、技術の進歩と拡散が（世界・地域の）安定を脅かしている。射程距離、命中性能、破壊力を増した新世代の巡航ミサイル、弾道ミサイル、空対空ミサイル及び地対空ミサイルが生産され、拡散している。近代的な潜水艦と戦闘機が多くの国の軍隊に導入され、機雷は機動力、識別能力、自律性を備えるようになっている。宇宙とサイバー空間は重要性を増すと共に、闘争の場となってきている。コンピューター技術の普及と進歩及びインターネットへの依存とネットワークの利便性向上が、数多の国家及び非国家攻撃者によるコンピューター攻撃の手段と機会を創り出しており、宇宙領域も今や通信、哨戒及び測位といった軍事能力に組み込まれている。特定のシナリオにおいては、旧式の機雷や高速攻撃艇、短射程砲並びに短射程ミサイルシステムといったローテクの能力でさえも、強圧的で攻撃的な主体による阻止に対して脆弱な公共財の中へと（自由な）通行を押しやり、これにより自由な通行が遅延されたり停止させられたりする。これらの能力により引き起こされる可能性のある結果は、その範

囲と規模において、米国と同盟国の遠征戦モデルによる戦力投射と機動に脅威を与えるような軍事的問題を提示している。

アクセス阻止･エリア拒否の脅威は、あらゆる単一の、或いは特定の作戦戦域を超越しており、国際的安全保障に対して問題をはらむ因果関係を創り出している。例えば、単一の侵略者が米国及び同盟国の部隊の戦域への展開を遅延させ、戦域内の望ましい場所からの有志連合の作戦を妨げ、友軍にとって不利となる遠方からの作戦を強要することが出来る。侵略者が米国と同盟国の統合作戦を効果的に弱体化させる一方、同盟国やパートナー諸国は潜在的な侵略者との共存の追及を余儀なくさせられるか、潜在的に地域を不安定化させるような代替自衛手段の開発に同盟国等を走らせる恐れがある。その様な環境は不安定を惹起し、米国による抑止の信頼性を侵食し、米国と同盟国の対応のエスカレーションを必要とし、関連する通商、経済及び外交的合意を含めて米国の国際的な同盟を弱体化する可能性がある。

問題の所在

米軍に対するアクセスとエリアを拒否する侵略者の能力は、一層先進的となり、適応性も増している。これらのアクセス阻止･エリア拒否の課題は、関心領域からさらに離れた場所からより高いリスクを伴って作戦することを強いることで米国の行動の自由に挑戦している。米軍は現在進行中及びその後の作戦を可能にするために、アクセス阻止･エリア拒否環境を（自らに好ましい形に）形作ることで、行動の自由を確保しなければならない。

この作戦上の問題に取り組む構想は、どのように侵略者がアクセス阻止･エリア拒否能力を利用するかについての現実的な仮定を基盤にしなければならない。エアシー･バトル構想を支えるこの仮定は、侵略者に何ができるかについての控えめな見方を反映しており、米国がどの様に対応でき、すべきかについて直接的な係わり合いを有している。

第 1 の仮定は、「侵略者は前兆又は警告抜きに、あるいは殆ど無しに軍事活動を開始する。」である。侵略者は、アクセスを維持するための米国又は同盟国の行動を抑止する試みとして、シグナルを送ったり脅迫するかも知れないが、侵略者は敵対行為の開始を感づかせることで得るところはないし、その必要も無い。弾道ミサイル及び巡航ミサイルといった能力は殆ど警告も無く使用され、航空兵力及び海上兵力の展開は曖昧な又は最小限の警告を伴うだけだろう。こ

の意味する所は、事前警告時間の短さ故に、米軍が極めて有能な侵略者に対して高いリスクの作戦を実施するための定常的に統合され準備された即応部隊の維持を必要としているということである。

第 2 に、事前の兆候や警告が無いことから、敵対行為の開始時に「前方展開友軍兵力はアクセス阻止･エリア拒否環境下にある。」このため、アクセス阻止･エリア拒否環境下におけるテンポの早い作戦を通じて、敵のアクセス阻止・エリア拒否攻撃に対する即時かつ効果的な対応を実施しうる不断の態勢と部隊の能力が必要である。脅威環境下に投入される増援部隊は、迅速に既存の部隊の態勢に組み込むことが可能であるべきである。

第 3 に、「侵略者は、侵略者の部隊に対する作戦を支援している米国及び同盟国の領域を攻撃する。」米国の航空機、艦艇、宇宙アセット、ネットワーク、人々への攻撃に加え、米軍へのアクセスを拒否するためには米国及び同盟国が作戦の拠点としている基地を攻撃する必要があり、これには同盟国やパートナーの領域にある基地も含まれる。このため、米軍がそこから作戦する全ての基地の防衛に、それが米国、パートナー、同盟国の領域のどこにあるかに関わらず取り組まねばならない。米国本土の基地でさえも聖域であると考えることは出来ず、本土防衛と海外作戦の間でリアルタイムな優先順位付けが必要となるだろう。

第 4 に、「侵略者によって全ての領域、すなわち、宇宙、サイバー空間、航空、海洋、陸上が争われる。」サイバー空間及び宇宙配備の能力は米国の作戦に不可欠であるが、コンピューターネットワーク攻撃や電子妨害が容易に実施できることから侵略者の攻撃に脆弱である。侵略者は複数の領域に同時に取り組む可能性があることから、エアシー･バトルは全ての戦闘領域を防衛し、対応しなければならない。

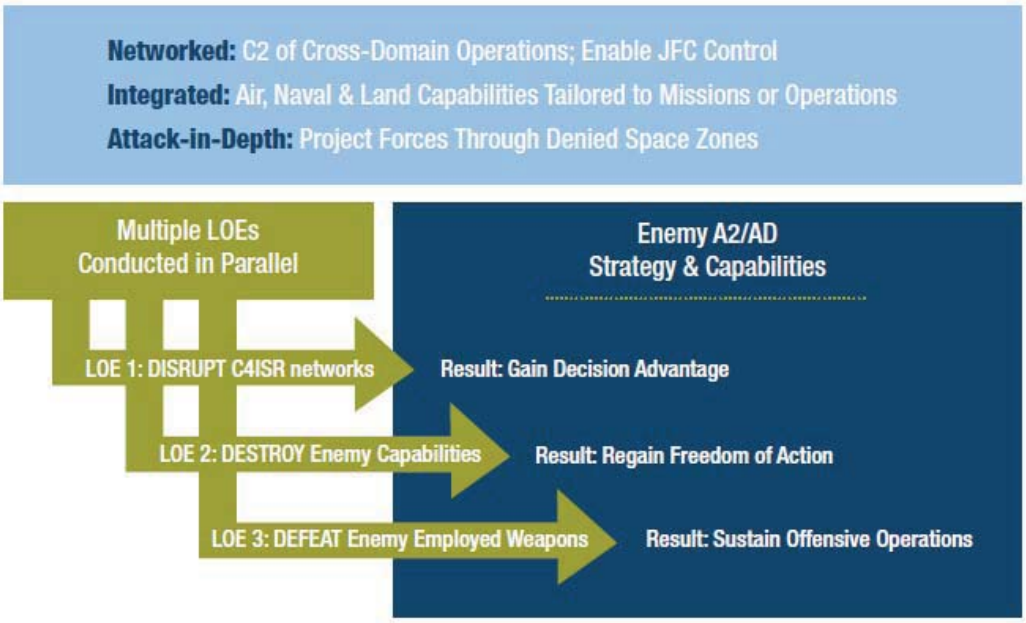
最後に、「いかなる領域も、完全に侵略者に明け渡すわけには行かない。」各領域は他の領域へのアクセスに影響を与え、拒否することができることから、ある領域を侵略者に明け渡すことは他の相互依存した領域についても最終的に喪失することにつながる。ただし、米軍は各領域における行動の自由を巡って争うかもしれないが、各領域のコントロールを同時に、また同じレベルで達成する必要があるというわけではない。このため、米軍は一つの領域における行動の自由の優位を、他の領域において米国の優位を作り出したり侵略者に対抗するために生かさなければならない。これには、各領域で行動できる統合化された部隊を用いた、領域にまたがる緊密に調整された行動が必要である。

3　エアシー･バトル構想

エアシー･バトルは、現在及び将来の戦力投射作戦を可能にするために、アクセス阻止・エリア拒否環境を変化させるのに統合軍に必要なものは何かを論述する限定的な目的を有した構想である。エアシー･バトル構想は国際公共財における行動の自由の確保を狙いとすると共に、同盟国を安心させ、潜在的な侵略者を抑止することを意図している。エアシー･バトルは「統合作戦アクセス構想(JOAC: Joint Operational Access Concept)」の下位コンセプトであり、国際公共財におけるアクセス阻止･エリア拒否全般の特定の技術的及び作戦的側面の詳細を示している。この構想は、特定の地域又は侵略者を対象とした作戦計画又は戦略ではない。その代わり、これは脅威の分析であり、いかにしてアクセス阻止･エリア拒否環境に対称的・非対称的に対抗しこれを変化させるか、そしてこれらの環境において成功するために必要な特徴と能力を有する統合化された(integrated)部隊を作りだすかを記述する一連の秘密版の作戦構想(CONOPS: concepts of operations)である。エアシー･バトルは構想面で提携し、計画面で協働し、アクセス阻止･エリア拒否に統合で取り組める部隊と能力を開発するために、軍種を跨いだ統合化したやり方で組織的に関与するためのものである。エアシー･バトルの目的は、単に作戦をもっと統合的に行うものではない。これは、すべの領域に亘って作戦面での優位を向上させ、軍の能力を向上させ、脆弱性を緩和するためのものである。他の統合及び各軍の構想に加えて、エアシー･バトルは国際公共財における行動の自由を獲得･維持する米国の能力を支援し、洗練された侵略者に対抗して現在及び将来の作戦を実行する手助けをする。

中核となる考え方(Central Idea)

国際公共財におけるアクセス阻止･エリア拒否の挑戦に対するエアシー･バトル構想の解決策は、ネットワーク化され(networked)、統合化された(integrated)部隊による縦深攻撃(attack-in-depth)で敵部隊を混乱(disrupt)、破壊(destroy)、打倒(defeat)すること(NIA/D3)である。エアシー･バトルのネットワーク化され、統合化された縦深攻撃(NIA)作戦のビジョンは、アクセス阻止･エリア拒否能力を混乱、破壊、打倒(D3)し、友軍及び有志連合軍に最大限の作戦上の優位を提供するため、全ての相互依存関係にある戦闘領域（航空、海洋、陸上、宇宙及びサイバー空間）にまたがる領域間作戦を必要とする。



ネットワーク化：領域間作戦の指揮統制；統合軍司令官による統制を可能に 統合化：使命又は作戦に適合した空・海・陸能力 縦深攻撃：拒否された空間を通しての部隊の投射
複数の努力系列(LOE)を平行実施　　敵の A2/AD 戦略＆能力 LOE1:C4ISR ネットワークの混乱>>>>>結果：意思決定の優位を獲得 LOE2:敵の能力を破壊>>>>>>>>>>>>>>結果：行動の自由の奪回 LOE3:敵の運用する武器を打倒>>>>>>>>結果：攻勢作戦の維持

図１：エアシー･バトルの構想デザイン「NIA/D3」の構成

領域間作戦(cross-domain operations)は、他の領域における目標を支援し、形成し、達成するために、複数の相互依存関係にある戦闘領域に基づく能力を統合することで実施される。領域間作戦は、他の作戦領域において我に有利で段階的に効果を発揮するために特定の作戦領域で非対称な優位を利用しうるものである。領域間作戦を万全な形で行うためには、指揮官は攻撃であれ防御であれ、作戦目標を支援し又は達成し、侵略者に対して優位を得るために、そのための能力がどの領域にありどの指揮官が保持しているかに関わりなく、これらの能力にアクセスする用意がなければならない。このインターオペラビリティは、望ましい結果を達成するために必要な全ての領域の能力にまたがる複数の道を辿る(multi-pathing)か、これに代わる複数の道を使用する能力を必要とするかも知れない。領域間作戦は、単一領域や単一軍種のオプションよりもよ

り複雑であるが、これがもつ複数の道を辿ることによる可能性は、作戦上の問題に対する単一領域又は単一軍種の解法に比べて顕著な作戦上の優位を提供できる。

能力、機材、プラットフォーム及び部隊を複数の領域にまたがって統合し、共に意思を伝達し、協力し、作戦する能力は、統合軍指揮官により多くの強力な選択肢を提供し、これにより作戦の成功に向けた一層大きな可能性がもたらされる。例えば、サイバー又は水中作戦は防空システムを打倒するのに使用できるし、航空部隊は潜水艦又は機雷の脅威を排除するのに使用できる。或いは、宇宙アセットは敵の指揮統制を混乱させるために使用できる。分かりやすく言えば、各軍の任務、機能別の責任範囲、特定の領域における能力の運用に関する伝統的な理解が、アクセス阻止・エリア拒否環境において想定される統合作戦を妨げる障害物となるべきではない。エアシー・バトルの構成概念の各要素は統合軍指揮官に更なる柔軟性と能力を提供するのだ。

ネットワーク化(Networked)

エアシー・バトル構想において、ネットワーク化された行動はあらゆる作戦領域にまたがる統合作戦を実施するために、任務に応じて編成された部隊の間でリアルタイムに緊密に調整される。これは、軍種固有の手順、戦術、武器システムに縛られない。ネットワーク化された部隊とは、相互運用可能な手順、指揮統制組織、情報に基づき行動を起こすことが出来る適切な権限により、時間と目的においてリンクされた人と機材である。これらの統合部隊は、（敵の）脆弱性を作り出し、利用するために敵のアクセス阻止・エリア拒否システムに縦深攻撃及び全ての領域にわたる攻撃を加えることができる。

ネットワーク化能力は、部隊が通信し情報を交換する物理的手段と、戦闘員が割り当てられた使命を完遂するために用いられる相互関係、プロトコル、手順の双方からなる。効果的であるために、ネットワーク化された部隊には相互運用手順、（指揮統制）組織及び機材が必要である。統合軍及び有志連合軍が意思決定における優位を獲得・維持するためには、適切な指揮統制レベルにおいて妥当な権限が付与されなければならない。エアシー・バトル構想において、ネットワーク化は、単なる保証された通信やデータアクセスだけを意味するものではない。ネットワーク化とは、任務のタイプに応じた命令に従い作戦を実行するよう訓練され、持続的な（通信）接続がなくても作戦が実行できる部隊を保有することである。統合軍はこの能力を部分的には軍種間、コンポーネント間、

作戦領域における日常的な関係を確立することで達成でき、これにより部隊は争奪中の悪化した環境において共に作戦するための効果的な訓練を受けることができる。

> エアシー･バトルは、各戦闘領域における単なる作戦面の相互干渉防止を超えて、一層多様で洗練された脅威を打倒するために必要な領域統合のレベルの創造を志向し、アクセスへの挑戦を軽減する。
>
> レオン･パネッタ国防長官
>
> 2012 年 2 月 20 日

統合化(Integrated)

統合化とは、ネットワーク化された作戦領域全体で作戦する部隊を作り出すための部隊及びその行動の手配を言う。統合化された統合部隊は特定の任務を実行するために複数の領域に亘って能力をより良く結合することができる。統合の基本構想は、予め統合化された(pre-integrated)統合部隊の創設の追及にまで発展してきた。潜在的な侵略者に対する優位を維持するため、航空、海上、陸上部隊は、その作戦を完全に統合化しなければならない。統合は、伝統的には地域軍司令官等(combatant commander)の職域に限定されると見なされてきたが、国防力整備の一環として軍種の線からも目を向け始める必要がある。

部隊は戦域に進入する前に予め統合化されているべきである。効果的な統合は、領域間作戦のための展開前訓練及び演習を含む、アクセス阻止･エリア拒否能力に対抗するためのより強化された統合及び協同訓練を必要とする。幾つかの事例では、事前の統合は、過度な冗長性やその反対に互換性の無いシステムを回避するために、インターオペラビリティを確保するための装備面での計画における軍種間協力をも必要とする。

混乱、破壊及び打倒のための縦深攻撃(Attack-in-depth to Disrupt, Destroy and Defeat)

縦深攻撃の方法論は、敵の攻撃の連鎖(effects chains)、すなわち敵が米軍の部隊を発見し、位置極限し、追尾し、ターゲッティングし、交戦し、その効果を判定するプロセスを基盤にしている。縦深攻撃は、時間、空間、目的及び手段において、戦闘領域にまたがって実施され、敵のアクセス阻止･エリア拒否能力を混乱させ、破壊し、または打倒することを目的とした攻勢的及び防勢的な

火力、機動、指揮統制である。縦深攻撃は、敵の防衛網を組織的に破壊（例えば、敵の統合的な防空システムへの反撃）することなく相手の致命的な脆弱点に取り組むために、物理的(kinetic)及び非物理的(non-kinetic)手段を利用することを狙いとしている。

D3 はエアシー･バトル構想の 3 つの努力系列を代表している。

- Disrupt: 敵の指揮、統制、通信、コンピューター、情報、哨戒、偵察(C4ISR 又は C4I)を混乱させる。
- Destroy: 敵のアクセス阻止・エリア拒否プラットフォームと武器システムを破壊する。
- Defeat: 敵が運用する武器及び部隊を打倒する。

敵の攻撃の連鎖(effects chains)を混乱させること(disrupting)は、理想的には友軍への攻撃を妨げるように、敵の C4ISR 又は C4I 能力に強烈な影響を与えることを含んでいる。敵の武器発射母体の破壊(destroying)又は無力化は、友軍の生存性を高め、行動の自由をもたらす。発射後の武器を打倒すること(defeating)は、友軍を敵の攻撃から防衛し、作戦の継続を可能にする。

アクセス阻止･エリア拒否の本質､及びおそらくは敵による攻撃の事前の兆候や警告は直前にしか得られないことから、展開済みの部隊を防衛し又は再配備し、陸上及び海上基地を防衛し、許容可能なリスクで駐屯地から部隊を前方に移動しながら､紛争開始後可及的速やかに効果的な攻勢作戦を実施することを、統合部隊は同時にできなければならない。相互依存の関係にある全ての戦闘領域の中で、望ましい戦闘空間の全域に亘って攻撃し、防御する能力は、統合の行動の自由を確立する上で極めて重要である。

４　統合軍の発展における役割

エアシー･バトル構想は、統合軍の発展に焦点を当てている。軍の構想の一つとして、エアシー･バトル構想は、地域軍等(combatant command)により運用される部隊を充足し、訓練し、装備する合衆国法典第 10 編(Title 10)に定められた責務に従っている。このことから、エアシー･バトル構想の目標は、国際公共財におけるアクセスの自由の担保を支援する前述の NIA-D3 能力を、最終的には地域軍司令官等隷下の統合部隊に提供するために、国防力整備を啓発することにある。エアシー･バトル構想は、国防省の戦略指針(DSG)「米国のグローバルなリーダーシップの維持：21 世紀の国防の優先順位(Sustaining U.S.

Global Leadership: Priorities for 21st Century Defense)」に記述された米軍の優先任務のいくつかを直接支援する様な将来能力を育成することを意図している。これには、侵略を抑止・打倒し、アクセス阻止･エリア拒否の挑戦にもかかわらず戦力を投射し、サイバー空間と宇宙で効果的に作戦する任務が含まれている。

米軍の優先任務

- テロ及び非正規戦に対応する。
- 侵略を抑止・打倒する。
- アクセス阻止・エリア拒否に関わらず戦力を投射する。
- 大量破壊兵器に対応する。
- サイバー空間及び宇宙で効果的に作戦する。
- 安全で、安定し、効果的な核抑止を維持する。
- 本土を防衛し、文民官庁に支援を提供する。
- 安定化のためのプレゼンスを提供する。
- 安定化及び対ゲリラ（反乱）作戦を遂行する。
- 人道支援、災害救難及びその他の作戦を遂行する。

エアシー･バトル構想は同様に、支援構想でもあり、最も重要な統参議長の部隊発展ビジョンである「統合作戦のための冠石構想：統合軍２０２０(Capstone Concept for Joint Operation: Joint Force 2020 (CCJO))」及び新たな「進入作戦のための統合構想(Joint Concept for Entry Operation (JCEO))」を補足する。頂点に立つ文書として、CCJO は将来の作戦環境、及び将来の部隊が一連の軍事作戦(ROMO: Range of Military Operation)においてグローバルに統合化された作戦を如何に実行する必要があるかについての高次元のビジョンを記述している。エアシー･バトルはこの作戦環境と統参議長のビジョンを達成する上で必要な幾つかの主要要素、特に将来の部隊における作戦領域間の相乗作用(cross-domain synergy)の発展の必要性に関して歩調を合わせている。

統合作戦アクセス構想(JOAC)は CCJO の下位の構成要素であり、いかにして米統合部隊がアクセスの脅威を乗り越えていくかについてあまねく記載している。JOAC は統合部隊がアクセスを確保し、アクセス阻止･エリア拒否の脅威を乗り越えていくために必要となる指針となる原則と能力を明示している。その次の（下位の）レベルにおいて、エアシー･バトルは JOAC をサポートし

ており、これは国際公共財における行動の自由を維持するために、統合軍が侵略者の脅威を打倒するために必要な、さらに特定された手段と必要条件を明らかにすることで行われている。

エアシー･バトルと同レベルの「進入作戦のための統合構想(JCEO)」は、アクセス阻止･エリア拒否環境における統合軍の進入作戦(entry operation)を可能にするための部隊の発展のための指針に焦点を当てるであろう。エアシー･バトルは、現行及び将来の進入作戦のための統合軍の能力を最終的には支援することとなる国際公共財における行動の自由並びにアクセスの必要性について論じているので、JCEO を支援するものとして見ることも出来る。

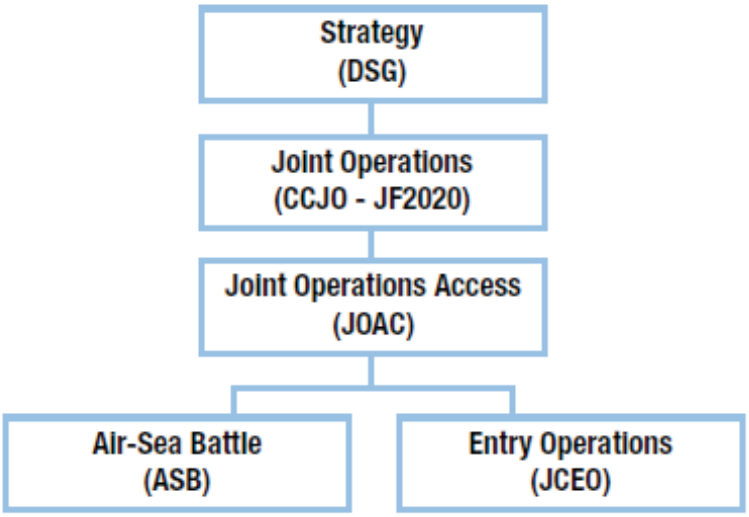


図 2　戦略、CCJO,JOAC, ASB 及び JCEO の関係

他の統合構想と同様に、エアシー･バトルは、新たな機材や能力を有する新しい部隊を創設することを狙うのではなく、その代わり、共により効果的に戦う部隊を整備するために、合衆国法典第 10 編に基づく努力を融合しようと務めている。この構想は、さらにネットワーク化され統合化された作戦の実施に向けた統合・多国籍戦闘がもたらす自然の産物である。これはいかにして独立した各軍種が公式に協力し、かつ、独自の軍種の能力、持ち分、文化を守り、発展させ、維持するかの一つの事例である。

エアシー･バトル構想は、軍が組織し、訓練し、装備する権限内で、統合部隊をドクトリン、組織、訓練、機材、リーダーシップ、人事、施設(DOTMLPF)といった包括的な視点で見る。エアシー･バトル構想は、特に幅広い脅威、例えば弾道ミサイルや巡航ミサイル、洗練された統合防空システム、ハイテクのミ

サイルや潜水艦並びにローテクの襲撃艇の一団による対艦能力、電子戦、対 C4ISR 能力などに取り組む。とは言うものの、エアシー・バトル構想は他の構想とは異なる点があり、それはエアシー・バトル構想が限定的な目標のための構想である故に作戦面での詳細を含む一方で、各軍内及び軍種間の制度的な変革、概念的な提携、物質面での変化を促進している点にある。

- アクセス阻止・エリア拒否環境が進化するにつれ、これに関連する継続的な組織的連携を通じて、軍及び統合レベルでの制度的協力も強化される。本構想はドクトリン、組織、訓練、機材、リーダーシップ、人事、施設(DOTMLPF)全般において、軍が組織し、訓練し、装備するための活動におけるさらに緊密な連携と統合が、長期にわたって行われることを予見している。これは、共同計画立案を通じた統合への努力の進展と、作戦及び戦術レベルにおける更なる統合訓練を強化するための一層の連携により達成されるだろう。
- エアシー・バトル構想のデザインを通して一貫している構想面での提携は、アクセス阻止・エリア拒否環境において地域司令官等(combatant commander)が指示する作戦目標を達成するために、如何にして能力と部隊が統合化されるかを述べている。構想面での提携のための活動は、大まかに言って 3 つの分野に分別される：構想開発(concept development)、図上演習(wargaming)、検証(experimentation)である。
- 物理的解決策とイノベーションは、適切な場合は相互補完的で、能力要求で定められている場合は冗長性がある。両者は完全なインターオペラビリティがあり、更には統合調達戦略に基づいて配備されることを保証するために、共同して開発され、吟味される。エアシー・バトルは、特定の予定表に基づく期待成果と共に、各軍の計画上の協力をさらに促進するプロセスを提唱している。このプロセスは、既存の軍の諸活動に取って代わることを意図したものではなく、これらの諸活動の利点を生かして、軍種間協力の焦点となるごとく機能する。

これらの主要な目標が、争われる領域全域を通して必要な場所で必要な時に攻撃し、防御することが出来るネットワーク化され統合化された部隊を作り出す各軍の努力の指針となる。これらの目標を通じて、エアシー・バトル構想はアクセス阻止・エリア拒否の挑戦に応える準備が出来ている予め統合された部隊を育てる努力をする。このような予め統合化された統合軍は、既述の常続的な

関係、インターオペラビリティ、そして領域にまたがる相互補完的な能力から造り上げられる。これは現実的で共有された訓練、作戦条件に基づく新たな戦術・技術及び手順(TTPs: tactics, techniques, and procedures)を開発するための柔軟性の強化から利得を得ている。その様な部隊は、今ある部隊で戦略抑止の保証と安定化効果をもたらすと共に、兵力構築と徹底的な任務のリハーサルにより、遅滞無く不測の事態に応じうる即応態勢にある。

5　執　行

2011 年末、国防長官はアクセス阻止・エリア拒否に取り組むために必要な最初のステップとしてエアシー･バトル構想を承認し､各軍にこの構想を更に発展させるべく働くようにと指示した。この目的のために、各軍は多軍種の、将官レベルのエアシー・バトル執行委員会(ASB Executive Committee)、上級指導グループ(Senior Steering Group)及び本コンセプトを執行する任務を負った支援スタッフを任命した。4 軍の其々の代表から構成されたエアシー・バトル室(ASB Office)の役割は、エアシー･バトル構想の NIA/D3 の構成概念の統一の取れた執行を通して、関係する構想的、制度的、物理的な解決策の開発と採用を促進することである。エアシー・バトル室はエアシー・バトル･イニシアチブを支持し、その進展を観察し、各軍の様々な関係者と調整する。

エアシー・バトル室は、エアシー・バトル構想の原案を更に実証し、精緻化し、拡張し、多軍種による執行のための計画を立案するために、課題別専門分科会を設立すると共に、執行委員会を開催してきた。この計画は、2020 年を目標に､現在と将来のアクセス阻止･エリア拒否に対抗するために必要な部隊を開発し、軍事能力を拡張するために推奨されるプロセスと行動を論述している。したがって、エアシー･バトルとは、先進的な能力が第 1 線に配備され、各軍が日常的な関係を拡張・強化し、各軍の組織し、訓練し、装備する活動が緊密に統合される複数年に亘るプロセスであると予期されている。

以下がエアシー･バトル構想を具現するために各軍が実施すべき活動の事例である。

軍の教育訓練へ、争われ、拒否される環境を取り込む

アクセス阻止･エリア拒否環境の中で作戦し､これに対抗できる部隊を作りだ

すために、軍は益々挑戦的となるアクセス阻止･エリア拒否環境を対象とした訓練を行うと共に、軍・機能・領域の各面にわたって、戦術、テクニック、手順を更に深く統合化しなければならない。軍は争われ(contested)、悪化した(degraded)作戦を、展開された(deployed)環境における統合化された訓練を通して、個人レベルから部隊レベルに至る教育訓練計画に取り組むことになる。求められる訓練上の焦点には、先進的な敵防空網を無力化するための統合能力のような能動的(active)手段と、包括的輻射管理訓練のような受動的(passive)手段を含む。教育にはエアシー･バトル構想及び統合作戦アクセス構想(JOAC)の教義と考え方を軍の専門軍事教育課程や各軍大学で教えることを含む。

各軍の演習と統合演習に争われる環境の特徴を取り込む

硬く防御されたアクセス阻止・エリア拒否能力の特性から、これらに対する攻撃は物理的であれ、非物理的であれ極めて厳しいものとなっている。争われる環境に進入し、生き残れるためには有人或いは無人システムは領域間にまたがる対策が必要となる。防勢的及び攻勢的作戦の両面で、領域間に亘る多軍種の訓練が焦点となるであろう。

統合作戦のための冠石構想（キャプストーン･コンセプト）(CCJO)、統合作戦アクセス構想(JOAC)、エアシー･バトル（ASB）をサポートする下位構想の開発を持続する

CCJO、JOAC 及びエアシー・バトルは、現在及び将来にわたる脅威の輪郭を描こうとしてきた。しかしながら、脅威を規定する戦闘の本質は、予想困難な形で発達する可能性がある。脅威や作戦シナリオは変化することから、エアシー･バトルの考え方を、更に詳細な形で、継続して発展させることが必要である。CCJO や JOAC をサポートし、エアシー･バトル構想の運用を支援するために、下位構想や補足構想が開発されるだろう。

アクセスの担保に必要な関係強化のため、構想面での連携やパートナーの能力構築を目的とした関与活動を実施する。

（構想の）執行を通じての関与活動が、同盟国やパートナー諸国との構想面での連携を確かなものとし、必要なパートナーの能力を構築し、紛争勃発時に複数の領域に対するアクセスを促進し、確保する様な関係を強化する。

特定の対アクセス阻止・エリア拒否能力及び構想の有効性を検証するため、幅広い研究と実験を行う。

研究と実験はコンセプトがドクトリンに進化するために重要である。エアシー・バトルのもたらす作戦面での対抗策の継続的な研究と評価が行われ、実験がアクセス阻止･エリア拒否の脅威を打ち負かす革新的な能力とプロセスとなることで、統合と連携の強化をもたらされるだろう。

領域間作戦の統合化された指揮統制を検証する。

指揮統制は統合作戦の心臓であり、魂である。有能な敵を相手にした多領域環境での戦闘においては、意思決定の優位と作戦上の成功を担保するために革新的な手法が必要とされる。各軍は領域間作戦を容易にする為、既存の指揮統制組織の見直しを行い、これを更に統合化する。

アクセス阻止･エリア拒否に取り組む多軍種の戦術・技術及び手順(TTPs: tactics, techniques, and procedures)を開発する。

現行の統合及び各軍の戦術・技術及び手順は依然として米国と有志連合の作戦上のアクセスが挑戦を受けていなかった作戦環境を主として反映したものである。JOAC とエアシー･バトルの複数年に亘る執行を通じて、軍レベル及び地域司令部レベルの組織が見直され、修正され、(いくつかの事例では) 必要な戦術、技術及び手順が図上演習、実験、戦術の開発、演習及び領域間訓練の結果を元に開発されなければならない。統合の戦術、技術及び手順はすでに軍種間の協同で開発されており、エアシー･バトルはより緊密で、迅速で、さらにユビキタスな連携を、どのように作戦し、情報を共有し、精強な部隊を練成することが最適なのかを基として追求していく。

現実的な作戦シナリオにおけるエアシー･バトル構想の適用に焦点を当てて各軍の図上演習を実行する。

合衆国法典第 10 編に基づく図上演習は、部隊の発展にとって、重要な方向性を決めるイベントである。４軍全てが進化するアクセス阻止･エリア拒否の様々な性質に取り組むことになる。各軍は相互に情報をやり取りし、それぞれの成果に基づいて働いていく。これには、専門家集団による他軍の図上演習への連携した支援も含まれる。

軍の資源についての計画立案における連携

統合軍は究極的には投資された能力次第であり、エアシー・バトルは資源についての計画作成の一層緊密な統合化を追及する。これはお互いが立案した能力のギャップとその統合的解決策の組み合わせに始まり、これに軍の資源管理者及び計画者が提供する連携・統合化された優先順位が続く。

エアシー・バトルと対アクセス阻止・エリア拒否のためのアイデアを統合及び各軍のドクトリンに組み込む。

最適手順(best practices)と戦術、技術及び手順が一度有効になれば、軍はこれを自らのドクトリンに反映する。これには既存のドクトリンの見直しと、適当であれば新たな、そして将来の環境に適合したドクトリンの使用の推奨を含む。

相互補完的又は類似の作戦目標についての軍組織間の日常的な関係の確立と強化

エアシー・バトル構想は主として艦隊と野戦部隊で実行される。作戦レベルと戦術レベルの双方の部隊における日常的な関係の確立を奨励し促進することは、エアシー・バトル構想の考え方を長期的な成功に導く上で死活的に重要である。これには、空軍の航空戦闘軍団(ACC: Air Combat Command)、海軍の艦隊総軍(FFC: Fleet Forces Command)、陸軍の訓練ドクトリンコマンド(TRADOC: Training and Doctrine Command)、及び海兵隊の戦闘技術開発コマンド(MCCDC: Marine Corps' Combat Development Command)といった第２層(Echelon 2)及び第３層の組織を含む。

、、、将来の統合部隊は、時間と空間における領域において、単に能力の運用を加算的に行い相互補完するのではなく、更なる統合化を領域間の相乗作用を改善するために利用する。米軍は各領域における及ぶ者の無い優位を維持する一方、領域を跨いで兵力を投射することで、決定的な優位をしばしば達成することも我々の能力である。

統合作戦のための冠石（キャプストーン）構想(CCJO)

6　結　論

エアシー･バトル構想を成功裏に具現するためには､現場の艦隊及び部隊から国防総省の司令部スタッフに至る包括的かつ日常的な関係の上に構築された、前例の無いレベルの統合及び協同の一体化が必要である。この挑戦に立ち向かい、準備を整えるためには、統合軍の発展、作戦、訓練、調達及び近代化におけるかなりの要素が関係してくる｡先進的なアクセス阻止･エリア拒否技術の拡散により、NIA/D3(networked, integrated, attack-in-depth/disrupt, destroy, defeat)という解決策が、米軍が前方で信頼感を持って作戦し、世界中に戦力を投射し続けるために必要な要素となる｡エアシー･バトル構想は、更にネットワーク化され統合化された作戦の解決策にむけた統合軍と同盟との関係の自然な進化である。依然として米国のリーダーシップが求められる変容する世界にあって､エアシー･バトルのような構想が米国の軍事活動の自由と戦力投射能力を維持するために必要不可欠なのである。

> 国防整備計画の現実は､Joint Force 2020 の約 80%が今日存在しているか計画段階にあるというものである。しかしながら我々は、二つの点で革新的となる好機を有している。我々は兵力の 20%を改革することが出来、我々は全軍を運用するやり方を変える事ができる｡新たな能力も必要不可欠であるが、我々の最も重要な進歩の多くは、訓練、教育、人事管理、リーダーシップの発展におけるイノベーションによりもたらされる。
>
> 統合作戦のための冠石（キャプストーン）構想(CCJO)